[illegible]

つて、これに餘人の企及し得ぬ眞實さを賦與した。そしてきくものゝ腸をえぐつた。

劈頭に甥に對する伯母の切ない別れの情涙をこぼしてみせたこと「孫は得見いで憂目をみる」に重點をおいて語つた古靱の意圖は、菅相丞と刈屋姫との生別のみを重視せず覺壽を中心とする骨肉相關の悲劇とする私の變痴奇論と靈犀相通ずるものがありはせぬかとも思ふ。

古靱大夫は「千秋樂の日はとりわけ心をこめて大切に語ります——」とかつて私に話された事がある。これでもう二度とこれを語る日がないかも知れない。こういふあの人らしい藝道一筋に生きぬいた人の高い心境から生れた心構へ、一期一會といつたやうな一種のさとり、深い藝愛の尊い心掛けには、思はず襟を正さずにゐられないおもひがしたが、今度の道明寺はひよつとしたらもう語れぬかもしれぬなどいふ漠然たる不安ではなく、太宰博士の解説の通り、文樂座の現狀、將來の見通しからいつて、その人がこれをこういふ風に完全に語り得ることはまづ絶無といつていゝ決定的な咄なのである。ふだんの千秋樂の日でさへ、それほどに心を入れて大切に語る人がもうこれ切りでといふ當夜の如き場合、如何に無限の愛執と感慨の一念をこめて語つたらうか。思ふだに美はしくもなみだぐましきことではないか。語る人もきくものにも一字一句にたまらない愛着の感じられる、心と心の交流し合つたえがたい一曲であつた。こういふ淨瑠璃史にも永く殘るであらう意義深い名演に接し得られた耳福を重ねて主催者の方々に深謝したい。

樂屋落ちじみた駄洒落で恐縮だが、古靱大夫と道明寺との名殘の段として、私は一入の興懷と愛惜をこの一段に繋いだものであつた。

端正なる熱演

辻部政太郎

五月二十六日夕、京大同學會文化部主催、太宰博士、武智氏等の肝煎で行はれた文樂鑑賞會に於ける古靱の「道明寺」は近頃の聽き物であつた。

「淨瑠璃雜誌」新舊同人の殆んどすべてに近い方々とお目に

かゝれたのも同時に欣びであつた。

「杖折檻より東天紅」までを語つた織大夫の途中から聽く。

「道明寺」は澁く難かしく所謂へちなものである。「菅原」の三つのヤマ、道明寺、佐太村、寺子屋と並べても、大衆性は最も乏しい。凡庸な大夫では語りとなせない。近來「菅原」を通しふうに出しても「道明寺」があまり出ない所以であらう。

序でながら、最近文樂での上演を調べてみると、昭和十四年五月、十年一月、六年五月、更に遡ると大正十五年五月に出てゐる。

昭和十四年五月

「道明寺」　杖折檻　（文字大夫 呂大夫）
東天紅　大隅大夫
丞相名殘　津　大夫
「寺子屋」　寺入　伊勢大夫
首實驗　古靱大夫

昭和十年一月

「道明寺」　杖折檻　（つばめ大夫 呂大夫 相生大夫）
東天紅　文字大夫
丞相名殘　（古靱大夫 土佐大夫 津大夫）
「佐太村」　櫻丸切腹　（古靱大夫 土佐大夫 津大夫）
「寺子屋」　首實檢　（古靱大夫 土佐大夫 津大夫）

昭和六年五月

「道明寺」　杖折檻　つばめ大夫
東天紅　大隅大夫
丞相名殘　古靱大夫
「佐太村」　櫻丸切腹　土佐大夫
「寺子屋」　寺入　文字大夫
首實檢　津　大夫

大正十五年五月

「道明寺」　杖折檻　（越名大夫 島大夫）
東天紅　靜　大夫
丞相名殘　古靱大夫
「佐太村」　櫻丸切腹　源　大夫

「寺子屋」寺　入　（相生大夫
首實檢　和泉大夫
土佐大夫

このうちで、十四年五月と、六年五月はたしかに聽いたことを憶えてゐるが、十年一月の、古靱、土佐、津三人の毎日替りの試みを別とすれば、古靱としては、六年五月以來、十一年振りであり、十年一月の場合から數へても七年振りになる。

因みに、彦六座系統では、比較的菅原の通しはよく出てゐて、次のやうになつてゐる。

明治四十三年四月
「道明寺」　三笠大夫
角　大夫
長子大夫
大島大夫
「寺子屋」　鰹　大夫
大隅大夫
丞相名殘

明治四十一年一月
「道明寺」　靜　大夫
司　大夫
住　大夫
「佐太村」　春子大夫
「寺子屋」　大隅大夫
明治三十九年一月
「道明寺」　三笠大夫
角　大夫
新靱大夫
「寺子屋」　角　大夫
春子大夫

明治三十四年一月
「道明寺」　鰹　大夫
長子大夫
住　大夫
「寺子屋」　大隅大夫

わざ〳〵右のやうな興行年譜を引いたのは、自分自身として一寸興味があつたからであるが、一つには、「道明寺」が淀いどちらかといへば難物に近いもので、近來では、古靱を除いては十分面白く語りこなせさうにないことを年譜さへ傍證してゐるやうで面白いと思つたからである。

當夜の古靱は正面から堂々四つに組んだ力演で、一言にして云へば、端正なる熱演だつた。

性格の語りわけもさることながら、特に、情景のかはり目に於ける雰圍氣の轉換の巧みさが印象に殘つた。（例へば、「や〻時移れば判官殿國只今これへお出と……」の前と後「始

の擬勢ぬけ〳〵に一人も殘らず逃失せたり」までとその後等）あとで古觀氏が「何しろ十年ぶりなので――、もう一度此次よく稽古したあとで語つた折一つ聽いて見て下さい」といつた言葉の端に、謙讓さとともに、昂然たる自信の程が窺はれたのであつた。（十七、六、二十一）

道明寺聞書

鴻池幸武

五月二十六日午後五時半より京都帝國大學學藝部主宰のもとに「菅原傳授手習鑑二段目切道明寺の段」が豊竹古觀大夫鶴澤清六によつて演奏された。古觀大夫、清六のこの段は、その初演以來定評ある名演奏である。最近の上演は、昭和十年一月、故竹本津大夫、故竹本土佐大夫と三人で、二段目三段目、四段目を夫々交替で演じたものであるが、今後文樂座に於ては色々な關係で一寸上場の機會が非常に少いかと思はれるので、右の非公開の上演の聞書を左に殘しておく。

「道明寺の段」は院本の全二段目中の最高峰とも稱せられる名曲であり、且難曲で、二代目竹本政大夫（通稱西口政大夫）場である。その政大夫風といふものは、決して筆で書き表はされるものではないが、初代政大夫即ち播磨少掾の門弟であるから、曲風の上に於ては最も本流的、古淨瑠璃的であるといへる。即ち、播磨少掾は、その師元祖義大夫が天性大音嬌喉で、その曲風から汲取れる「文章を語る中に謳ひ、謳ふ中に語る」といふイデオロギイを、小音ながら自ら工夫した音遣ひを以つて技巧的に完成した人である。故にその門弟で、師の風を深く學んだ西口政大夫の風に於ても、「語る」といふこと、即ち、息をツメ、間をツメ、假名をツメることを以つて內容の眞髓を表現すること、の中に、それに備へらる可き位取や情合や模樣を表現する「音遣ひ」で以つてそれが曲節となり、更にそれらを融合せしむ義大夫節の特殊技巧である「色」や「地色」が配合されてゐるものである。換言すれば西口政大夫の風は、「息と間」と、「音遣ひ」と、「色」と「地色」がその運びの殆んど總てゞあるといふことになる。後年に到つて、右の「語る」ことが忘れ勝ちになつてゐたのを引